姫君よ、我が軍門にくだれ

わだち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
姫君よ、我が軍門にくだれ

【Ｎコード】
Ｎ０４３６Ｔ

【作者名】
わだち

【あらすじ】
侵略の危機にさらされ、今にも自ら命を絶たんとする小国の姫に差し出された選択肢。
それは城の給仕人からの、予想もしない申し出だった。
「――あなたが私の妻になってくださるのなら、一夜にして皇国軍を退却せしめてごらんにいれましょう」。
気丈な姫君と策士な給仕人の攻防戦。

1.　ともに死出の旅路を歩もうぞ

金の玉座には、老いた王。
その足元には、美しき姫君が三人。
――ああ、穢れなき白ユリの聖母よ。気高き薔薇の女神よ。可憐なるヒナ菊の妖精よ。
そう吟遊詩人が喩えて曰く、
通称＜フローデンス国の花の三姫＞と名高い彼女らは今、しかし萎れた花の風情であった。
ほっそりした真白き手にそれぞれ毒の入った酒杯を持ち、澄んだ悲しい瞳で父であるフローデンス国王を見つめている。
城の中庭では忠実な臣と民草たちが身を寄せ合い、一心不乱に古の神々へ祈りを捧げていた。幼い子らは不安げに母親の膝にすがりつき、きょろきょろと辺りを見渡しては一体何が自分たちの平穏を奪ったのだろうと考えている。城砦には数少ない兵たちが気丈に槍をかまえているが、それがあまりにささやかな抵抗でしかないことをなにより彼ら自身がわかっていた。
皇国軍が告げる鬨の声は、刻一刻と近づいてきている。
いずれ最初の火矢が放たれるだろう。
それが侵略の合図。

「泣くな、我が姫たちよ」
齢六十。顔には深い皺が目立つものの、いまだ凛とした気品を保つ王は語りかけた。
「たとえ我らが命尽き、国は滅ぶとも、我らがフローデンス国の誇りは永遠に生き続けるだろう」
「ああ、お父様……お母様が生きていらっしゃったらなんと悲しま

れたことでしょう」
　長女シルヴィアがそ、と涙をぬぐう。
「なぜわたくしたちの国を？　ここには金鉱も豊かな財源もありません。他国を害する企てなど、もとより考えてもおりません。ただ素朴な自然と、心優しき人々が慎ましく暮らしているだけだというのに。一体なぜ」
「キノコのせいよ」
　末娘フランチェスカがあっけらかんと答える。
「フローデンス産のキノコは大陸では高級食材として人気なんですって。市場価格がすっごく高いんだから。もうぼったくりってレベルよ、正直。昔の香辛料貿易も真っ青。輸出をもっと増やしたら、お父様？　滅びたら意味ないけど」
「まあ……皇国の方々はキノコが大変お好きなのかしら」
「それで侵略してくるくらいに？　小国だからって馬鹿にしすぎだわ。お姉さま言ってやって。キノコぶっ刺すわよケツの穴にって」
「まあケツの穴」
「そんで直腸内で培養させて鼻から生えさせるわよって」
「なんて恐ろしいの、口からも生えてくるかしら？」
「口から生えたらおいしいじゃないの」
「――ウホン」
　父は空咳をして娘二人の会話を止めた。
　普段は次女がその役目を果たす。けれども当の次女は、先程から頑なに口を閉ざして毒酒に目を落としている。
　彼は愛情のこもった眼差しで二番目の娘を見た。この娘が一番母親に似ている。あれも気に食わないことがあると、むっつりと貝のように口を閉ざしたものだ……
「セラフィナよ」
　名を呼ばれ、セラフィナはゴブレットを握る手にぎゅっと力を込めた。
　明るいエメラルドグリーンの瞳を野火のように燃え立たせ、キッ

と顎を上げて父王を睨む。顔の周りを縁取る赤銅色の巻き毛と同じく、その声音も炎のように勇ましい。
「お父様は本気で自害するおつもりなのですか」
鋼の剣よりも強く言う。
「わたくしは嫌です。戦わずして降伏するなど。死ぬのなら戦って死にたい」
でもお姉さま、とフランチェスカ。
「武器なんて畑の大根くらいしかないじゃない」
「大根でも戦えるでしょう。要は心意気の問題よ」
「セラフィナ……けれど大根はお尻の穴に入りきれないんじゃないかしら、太すぎるでしょう？」
「だれもお尻の話なんてしてません、シルヴィア姉さま」
ぴしゃりと言って、セラフィナは再び父に向き直った。父の瞳は暗く翳っている。
急に疲れが押し寄せたように、王は長く重たい溜息をこぼした。
「戦え戦えとそなたは申すが、セラフィナよ。我が国は建国以来、一貫して平和主義を掲げてきた。どの国とも中立を保ち、戦争など一度もしたことがない。兵はわずかに城の護衛が百人あまり。町の警吏を含めても三百は超えないだろう。皇国軍五千の兵にどうやって勝つというのか」
「勝ち負けの問題ではありません。負けても、誇りと栄誉は残ります」
「だが皇国に侵略されれば、田畑は焼かれ、男たちは殺され、女子どもは奪われるのだぞ。愛しいそなたたちは皇国軍の将校らの慰みものとされるだろう。生きて、そんな恥辱に耐えろというのか」
「恥辱など――」
「辱しめを受けるより、誇り高き死を選ぶのが王というものだ」
「不死鳥のように絶望の底から這い上がってこそ、真の王ではないのですか」
灰色の口髭の下で、薄い唇がぐ、とこわばる。

「セラフィナ、そなたはまだ若い。若さゆえに、不屈だが愚かでもある」
それ以上議論は許さぬとばかりに、王は無言のまま立ち上がった。
右手に持った金のゴブレットを胸に当て、ゆっくりと眼前に掲げる。
その仕草に三人の姫たちは瞳を伏せた。
ただ父に寄り添い、静かに頬を濡らすシルヴィア。寂しげに俯くフランチェスカ。きつく唇を噛みしめたまま、己の矜持と父への愛に揺れるセラフィナ。
この手で慈しみ、大切に育ててきた娘たち。
（わたしの娘だ）
愛情と哀れみで胸がいっぱいになり、老いた男は息をするのも苦しかった。最期を悟った我が子らの眼差しは、どんな毒薬よりもこの身を苛む。しかし告げねば。時間がないのだ。
そして賽は投げられる。
「――毒杯をとれ、我が娘たち。ともに死出の旅路を歩もうぞ」

2.　この大事なときなればこそ

城の大広間の扉の前で、男は祈るように瞳を閉じて立っていた。豊かな黒髪にほっそりした肢体。均整のとれた体躯と気品のある横顔は、彼の着る粗末なお仕着せとはそぐわない。長く繊細な睫毛が白い鎖骨に影を落とし、燭台の灯りで揺れている。

城の外からは皇国軍五千の鬨の声。

ぶ厚い石壁を通して、それは城の重たい沈黙を不気味に震わせる。静まり返った廊下に、他に人気はない。城の使用人たちはみな、数少ない民とともに中庭に身を寄せ合っている。老いた王と、その娘たちにせめて静かな最期をと。

忠実な民たちだ。

善良で、慎ましく、従順。

しかし弱小。

彼にとっては、虫けらも同然。

滅びようが、蹂躙されようがかまわない。この世のすべては、我が愛しき人の前には塵も同じ。

――ようやく、この時が来た。

まるで墓場のごとき静寂の中、彼だけが躍動する生気に満ちていた。

今このときほど、生をこの身に感じたことなどない。

頑丈な樫の扉は僅かに開き、中の様子が見てとれる。その僅かな隙間でも、彼の愛しい炎は見逃しようがなかった。赤く、気高く、猛々しい炎のように渦巻く赤銅色の髪。どんなに遠く離れていても、彼の心臓を駒鳥のように高鳴らせるエメラルドグリーンの瞳。今は神経質そうに強張った細い顎の線さえ、魂の底から――愛しい、という思いがあふれてくる。

その強張りを指で撫で、硬い蕾をやさしくほぐすように慰めてや

りたい。潤んだ瞳の瞬きを間近に見、その蝶のように繊細な感触を頬で感じたい。あのかぐわしい豊かな髪に顔をうずめ、どんな媚薬よりも強力に男を蕩かす肌の匂いを嗅ぎ――

「……ああ、セラフィナ」

呟きはまるで愛撫のようで、彼自身にもかすれて聞こえる。

それは吐息のせいか。いやあまりに強すぎる想いのせいだ。この感情。この執着。この三か月の間、彼の身体は欲求不満でささくれ立ち、心はかの人を求めて悲鳴をあげ続けていた。彼女が欲しい！

どうしても！　身を千に引き裂くような渇望。その衝動の強さに息も忘れる。

けれどもう、それも終わりだ。

――すう、と音もなく開いた彼の紫紺の瞳は、いっそ酷薄なほどの決意に煌めいていた。

「セラフィナ……我が愛しき炎よ」

賽はすでに投げられたのです。

男は我知らず微笑み、大広間の扉を開けた。

死の帳に包まれた城の大広間に、涼やかな声が響き渡る。それはまるで一陣の風のように。

「――どうかお待ちください、皆様方」

＊　＊　＊

突然大広間に姿を現した人物に、その場にいた全員がハッと驚いて顔を上げる。

四つの眼差しに凝視されながら、男は悠然と歩みを進めた。規則

正しい足並みに床に敷かれた干し草がカサカサと鳴る。
「そなたは……？」
王が出鼻をくじかれたように、呆然と呟いて彼を見る。
右手には金のゴブレット。その縁には赤い滴が垂れている。しかし王の豊かな口髭には赤い滴はしたたっていない。彼のタイミングは秀逸だった。王はまだ、かろうじて毒酒を飲んではいないのだ。
男は微笑みを崩さないまま玉座の手前で足を止め、丁重に腰を折った。まっすぐな黒髪が肩に垂れる。
「――ロシェと申します。三か月前、こちらで雇われて以来給仕人として働いてまいりました」
王は戸惑っているようだ。
「しかし……」
「一体なぜここにいるのよ」
王の代わりに、末娘フランチェスカが生意気そうに口にする。
そばかすの浮いた小さな鼻。空色の瞳はぱっちりとして悪戯好きの小妖精を思わせる。もう少し年を重ねれば、さぞ小悪魔的なその容貌で恋に溺れた男たちを苦しめるだろう。――ロシェにとってはどうでもいいが。
「忘れものでもしたのですか？　それとも、中庭への道が分からなかったとか……」
長女シルヴィアが、ほっそりした白い喉に手を当てて言う。
慎ましやかな薄紅色の唇は、新雪に咲いた春告げの花のようだ。無論、ロシェにとってはどうでもいいが。
そして。
「――給仕人？」
グリーンの瞳を訝しげに細め、鋭く端的に皆の疑問を口にしたのがセラフィナだった。
途端にロシェの口元がぴくりと反応したが、その僅かな変化に気づいた者は誰もいない。
「給仕人風情が、一体何の用なの。この大事なときに」

ロシェは必死に頬に力を込め、微笑みを崩すまいとした。
心臓が激しく肋骨を打ち、高まる期待感に歓喜の叫びが喉元までせり上がってくる。元来、望むままに生きてきた男だ。欲するものをあますことなく手にし、この世の権力と栄光をその身に宿して生まれてきた。その彼が粗末な麻服に身を包み、他人の命に頭を下げてきたのは何のためか。――この時のためだ。
今、彼の望みは僅か数歩の距離にある。
「この大事なときなればこそ」
表面上は落ちつき払って言い、真っ直ぐに王と姫君たちを見据える。
けれど彼の眼差しは、心は、ただ一人の姿だけを追っていた。
――セラフィナ。
初めて目にした瞬間から、彼を一瞬で虜にしたその輝き。不屈さ。高慢なまでの気高き矜持。
三か月前。
ロシェがこの国を訪れたのは、単なる偶然。彼の悪癖ともいえる放浪癖の産物で、意味などなかった。グランバルド共和国へ渡る通過点でしかなかったのだ――彼女に出会うまでは。
ロシェはその日を境に己の本来の境遇を捨て、しがない給仕人へと身をやつした。瞬き一つで他人を従わせる男が、しつけの良い犬のように他人にかしずいてきた。
すべては彼女のそばにいたいがため。
すべては彼女のためだ。

給仕人ロシェ。
またの名を、ロシエフォール＝ヴァン・ベルフォーク。
皇国の名高い第一皇位継承者こそ、他ならぬこの男だった。

――セラフィナ。
ロシェは何万回、何億回と繰り返した名を胸のうちで囁き、右手

を静かに差し伸べた。まっすぐ。愛しい人に向けて。
玉座の上で、王と娘たちがわけも分からずこの奇妙な闖入者を見つめている。
恋は狂気。
さればこそ美しい。
「王よ、お命を絶つのは早計です。少しお待ち頂ければ、私が一夜にして見事皇国軍を退却せしめてごらんにいれましょう」
あまりに荒唐無稽な言葉に声を失う全員に向かって、ロシェは再び完璧なお辞儀をした。
艶やかな漆黒の髪が、さらりと衣擦れに似た音を立てる。
「――ただし、その見返りに私の願いを一つ。聞き届けて頂きたく存じます」
しばしの沈黙のあと。
何を望む、と王が言う。
まるで何百年も語り継がれてきたおとぎ話のように。
ロシェは笑った。恋に溺れ、恋に世界を捧げた男の晴れやかな笑顔で。
「あなたの娘を、王よ。セラフィナ姫を私の妻にいただきたい」
セラフィナの怒気を含んだ悲鳴さえ、恋に身も世もなくした男にとっては甘い天上の調べに聞こえた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0436t/

姫君よ、我が軍門にくだれ

2011年7月25日03時39分発行